



左から谷口、辻井、石川、進藤、八木
小川 写真提供「山口」

会場

ホテル・サンフラワー

十一月十九日

出席者

石川 俊夫
八木 健三
山口 透
谷口 一芳
小川 巖
進藤 勉

司会 辻井達一



会誌第二〇号を迎えて

— 草創時代は？ —

辻井 自然保護協会誌もこれで二〇号ということになりました。一つ、それこそ草創時代からこの会誌に関わってこられた山口さんから。

山口 雑誌を作るんだからうまくやってもraithたい、と当時の委員・斎藤春雄さんからいわれましたね。なんとなくお手伝いを始めたわけですよ。それから当時、楡金幸三さんもこういうことに情熱をもっておられましたから、そのあたりからの話もあったのではないのでしょうか。

八木 会自体は、もつと前からあったんでしょうか？

石川 それ以前はまあ、サロン風でしたね。いまのような形ではなかった。ちゃんとした出版物はなかったですね。

ああいう会があってもいいんじゃないかと思えますね。

辻井 一、二号あたりは石川先生のいわれたように特に別の出版物はなかったんで、会誌に自然公園の報告なんか載せていましたね。三号くらいから何か特集を、という考えが出てきたようですが、この当時はとくに編集会議を固くやって、ということではなかったんじゃないですか。

石川 集まった原稿の顔を見てから、山口さんにボンと預けて、というふうなね。

八木 調査報告というのはその当時、どんなものでしたか。

石川 これはいまのとちよつとちがつて、まあ意見書みたいなものですね。自然公園を見て意見を述べる、といったものでした。

山口 そんな調子で、どつちかというといわゆる草創時代は原稿次第でやって行く、というものでしたね。

— 雑誌の顔、表紙とカット —

辻井 さて、雑誌の形ですが。

山口 体裁ですか。私の道楽かもしれませんが、機会があったら無双野を使ったデザインを考えていたんです。B5判のサイズであれば使ってみたいと思っていましてね。これはまあ、ある程度は成功したんじゃないかと思っています。

石川 たしかにちよつと変った、上品な形だと思えます。評判は上乘でした。

八木 深い、というところでしょうね。こういう体裁の雑誌というのは、そう多くはないんじゃないですか。

辻井 そこで雑誌のイメージなんですが、

山口 これにはカットが大きく働いていると思うんです。そのあたりを一つ。カットについても斎藤春雄さんの助言がありまして、谷口一芳さんに、ということになったんです。

谷口 さっき話にでたように、山口さんは雑誌の体裁にあるイメージをお持ちだったんでしようが、カットとなると正直なところ、第一号は無方針なんです。見当がつかない。しかし、第二号からは雑誌の趣旨が呑みこめてきたので数枚まとめて描いて渡しておいて、中からイメージに合ったものを山口さんがえらんで載せる、ということになったんです。

辻井 表紙の画なんかもなかなか大変で色とのバランスをとらなきゃならぬ。ミューズ・コトンを使ってこれに色を掛けることがありますね、効果がでたり、思うようでなかったり。しかし、総体として七〇〜八〇パーセントは成功した、といっているでしょう。

辻井 表紙の色は少し上品すぎる、目立たないというんで山口さんにもっと濃いや、はつきりした色を使って下さいと無理をいったことがよくあります。

山口 たしかに、どっちかという淡い色が多い。濃い色には私、生まれつき抵抗感があるんですよ。それに色が濃いと、印刷インキの重ね具合との都合もありますしね。

谷口 本の表紙は顔なんですから、売らんなら派手でなきゃならない。しかしこういうタイプの本は、これでいいんじゃないですか。

八木 カットの画柄は原稿に合わせるんですか。

山口 雑誌の編集者によっては、たとえばクマのことを書くとかクマの画、なんて人もいるわけですよ。挿絵とカットをはきちがえているわけです。会誌では、原稿にカットを合わせることはしていないんです。一言でいえば無難なものを選ぶ、ということでしょう。

八木 植物の画が多いと思うんですが。

谷口 動物や鳥の画も描くんですが、植物はやっぱ描きやすいですからね。

辻井 これだけの表紙の画があり、カットがあるんですから原画展でも開けるんじゃないませんか。

— グラビアと写真 —

辻井 写真についてはどうです。グラビア

のページは、ほとんど山口さんにお願ひしていましたからね。

山口 グラビアですが、本文の写真選びも大変です。というのはグラビアは特集的にやるんで、方針さえ決まれば後はいい写真を探すだけなんです。が、本文のほうは何しろ出す人は全部写真を使ってくれ、入れてくれという考えがありますからね。無いほうがいいというような写真もかなりありますよ。

辻井 「図」や「表」はどうです。

山口 図のひどいのは全く困る。鉛筆描きのがあったりしてね。数になるとトレースや版代だって馬鹿にならないもので。

辻井 原稿のほうもひどいのがありやしませんか。

山口 会員は皆さん、最高の方々がいらっしやるんですが、原稿を書いてもらうとなると書き慣れない人もいますわけです。再三、注意書きは出しているんですが、なかなかきちんと言っているんで、縦書きと断わっていても横書きにしてくるとかね。中には、原稿用紙の縦・横さえ逆にする人もありますよ。

谷口 「投稿規定」や「要領」は毎号入

ておくほうが親切ですよ。

— 移りかわる時代と会誌 —

辻井 こう並べて見ますと九号まで、つまり一九七一年までが一つの区切りのように思えるんです。十号から、つまり一九七二年からはいわゆる環境問題、公害というようなことが強く意識されはじめてきたんですね。協会としては、伊藤秀五郎先生が会長になられた頃です。

伊藤先生は「巻頭言」などに正に世を憂える名文を書いた下さったのですが、十号に出ている、当時、美唄の林試で開かれた自然保護シンポジウムでの基調講演、これはきわめて格調の高いものでした。

会員の幅も広がって、会誌に書いていただく方もたとえ十一号には牧師の斎藤義信さんが書いておられるように、自然科学系ばかりではなくて多様化してきているんです。

十二号から編集委員も変えまして小川さん、当時、大学院生だったですね、加わっていただいた。

小川 特集主義を強く打ち出して後でも資料として使えるようにと、たとえば大雪山特集(十二、三号)なんかは

少々固いとは思いましたが、文献も載せました。聞くとところによると、会員外の人にむしろ好評だったようです。

山口 「巻頭言」は、スペースは少ないけれど重要なものだと思って必ず出す、必ず書いてもらう、という考えだったんですがいかがですか。

谷口 それは、やっぱり重要ですよ。いわば社説ですからね。

八木 私もそう思う。私も書かされたけど、まあ、ご期待にそえたかどうかは分かりませんが。

「馬の耳」と名付けた

—— かった「会員通信」——

辻井 「巻頭言」も大事ですが「会員通信」も面白いでしょう。しかし、なかなか集まらないところでしたね。

八木 「会員通信」はフォーラムなんだから皆が自由に出さなきゃならないんだが、やっぱり声をかけなければなかなかね。

山口 狙い撃ちで集めるというのは、いまでもやっているんですね。

辻井 「会員通信」という欄を作るときに、北海道林務部の広報紙「林」の「熊の耳」という欄をもじって「馬の耳

」にしようよと、かなり強硬に主張したんですがね。あんまりだというんで取り上げられなかった。いまでも残念に思ってるんですよ。

小川 「会員通信」というのはページ数は決して多くはないんですけど、かなり本音ができる場所ですね、協会に對する正直な意見がね。この欄をいい方向に持っていくにはどうしたらよいか、ひと工夫欲しいところですね。

八木 「会員通信」はそういう意味でも、もっともっと増強してもいいね。

山口 理想からいえばたしかにそうなんです、協会の現況ではどうなんでしょうか。

—— さて、今後は？ ——

辻井 会員からいまままでどういうのがよかったか、とかいう声を聞いたらどうですか。それによって、今後を考えるうえでいい材料になると思います。

谷口 読者としては会誌を年二回、というのが望ましいとおもうんですよ。会との結びつきという意味でもね。

辻井 出版事業というのは、自然保護協会の主要な活動であるべきだと思います。

す。

進藤 現在の予算規模では、ちょっと年二回というのは困難でしょうね。

谷口 年一回で、ヴォリュームをふやすというのはどうです。情報としては、きわめて重要ですよ。

山口 それもできないから頭が痛いんじゃないですか。仮りにできるとしたならば、むしろページを減らしても二回発行というのが、雑誌の性格としてはふさわしいと思うのですが。

辻井 雑誌を会費だけでまかなおうとするのは無理ですから、一つは魅力的なものにする、「ナショナル・ジオグラフィック」みたいなベスト・セラ

ーにしてしまえばいいんですよ。たとえば大きすぎますがね。

進藤 中身はいいんですが、名前が会誌、というところで売れないということもありますね。

辻井 名前を変える、たとえば自然保護をというところを自然、というように展開して、実質的に自然保護に役立てばいいとすれば、かなり読者数も増えるとおもうんですよ。

八木 売れるというところに傾きすぎると、売れるがための内容にしばらくは恐

小川 本格的な動物雑誌として知られる「アニマ(平凡社)」は動物だけでなく、かなり広く問題をあつかっています。発行部数も数万部にも達していると聞いています。

谷口 読者の幅を広げようというのについては、たとえば道東で漁業をやっている人なんかは、かなり環境に関心を持っていますよ。

進藤 魚もいいでしょうね。関連して水とか川とかいうのに展開することも考えられるんじゃないですか。

辻井 いま、魚とか、水とか、いろいろな分野への展開の話がでしたが、今度の「道路・特集」もその方向を指しているわけです。多くの分野の人が自由に意見を述べることができると、いわば言論の広場ですね、それを目指すべきではないかと思うんですよ。

さらにそれを効果的にするにはチャンスを狙うこと、漁業が問題になっていたらすかさず魚や漁業問題をとりあげる、といった心がけが必要でしょう。いつも問題にされるような雑誌にする必要があるんじゃないでしょうか。